

偽撰の背景

本学教授 河内 昭 圓

河内でございます。初めに申し上げておかなければなりません。私は「偽撰」ということ、それ自体に格別の興味を持つ者ではありません。ある調べごとをしていて、あれこれ偽撰に違いないと気づき、なんでまたこんなものかと思うことがありました。ちょうどそんな折りに本日の講演依頼があつて、講題を求められ、たまたまといった感じのなかで「偽撰の背景」と報告したのであつて、さして深い意味があつたわけではありません。

講演の期日が迫つて、それなりに体裁を整える必要があるので、他の方の意見もみておこうと思ひ、若干の目配りを試みたところ、ただ驚き、萎縮するばかりの現実を目の当たりにすることになりました。たとえば特集「偽書の文

化史」(月刊『言語』第三〇巻第八号、大修館書店、二〇〇一年七月)というのがあります。佐藤弘夫『偽書の精神史』(講談社選書メチエ二四二、二〇〇二年六月)というのがあります。わずかにこれらの書物を読むだけで、和漢洋、古今の東西にわたつて偽撰あるいは偽書というのは延々と話題を提供し続けていることがわかります。ちなみにコンピュータをつかつて「偽撰」を検索してみると六三件の項目を見ることができ、偽撰よりも「偽書」の方が一層一般的なのでしょう。「偽書」にいたつては四六四〇件の検索項目が得られます。四六四〇という数字を見てはとてもそれらを開く気が起こりません。あるいはまた、私には「文化史」「精神史」などという大きなまとめる能力はありませんので、ここではそういう主題の捉え方はご勘弁願います。

さて、偽撰というのは、偽物の文書あるいは書物を指していると思います。権威あるものの名を冠して作るのです、その権威に対して偽物であるということである。古来数えるに堪えない量のものが撰述されてきました。私が初めて偽撰ということを知ったのは、研究生活に入った当初、中唐の古文家柳宗元(七七三—八一九)と仏教というテーマを持つてその文集を読んでおりました。作品の一つに「永州龍興

寺修浄土院記」(『柳河東集』卷二七)があり、そこに「晋の時、廬山の(慧)遠法師。念仏三昧詠を作り、大いに時を弘宣す。(略)遂に天台十疑論を以て、以て牆宇に書し、観る者をして信を起こさしむ。」という一文があります。

この文は永州龍興寺の僧重巽が浄土院を修したことに因んで書いたものであるが、当時はこれを読んで、崇仏家でも知られる柳宗元について、この古文家は浄土教の信奉者でもあったのだと思つたことでありました。浄土教と柳宗元ということになると、当然、今は『塚本善隆著作集』第四卷「中国浄土教史研究」に収める博士の諸論文に教えを請わなければなりません。そこで初めて『釋浄土十疑論』が偽撰であるという事実を知つたのであります。博士はしきりに「又この頃の天台教徒は、宗祖智顛が弥陀浄土の願求者であり、かつその真撰として『観無量寿経疏』、『浄土十疑論』等があると信じ、これらの書が漸く浄土教徒の指針として尊ばれるという情勢を醸成しつつあった。」(上記著作集所収「法照伝考」というような表現をもつて浄土教の隆盛を論じておられる。偽撰は偽撰なるをもつてその価値を減ずるものと短絡的に見るのでなく、その書の出現と流行から時代の趨勢を読みとる姿勢にこそ偽撰を今に読む

意味合いがあるという博士の視点です。

私自身はその後詩僧皎然が著した十首の高僧のための碑文を論じたことがあります。(『皎然集』と贊寧『大谷学報』第七三卷第一号、一九九三年一〇月。並びに「詩僧皎然の仏教」『文藝論叢』第四二号、同一九九四年三月) 碑主たちはおおむね天台の教義を信奉する人々たちであるが、臨終にあつたの強烈な浄土信仰に接して、ここに表現される高僧たちの生きた時代が『釋浄土十疑論』の出現と時を同じくするところから、偽撰の背景を自分なりにかいま見たのであります。柳宗元は合理主義というよりも、現実主義というにふさわしい人物です。「弁亢倉子」・「弁鶡冠子」(いずれも『柳河東集』卷四)などを著してその書の矛盾を指摘し、後世の偽撰と断じています。その人にして『釋浄土十疑論』の偽撰を疑わなかつた事実からしても分かるように、偽撰はその出現期にはおおむね真撰として通用したものとごくである。偽撰を生み出すに十分な背景を持つていたからであります。

偽撰は、時代・地域・政治・宗教ことに教団などのさまざまな必要に応じて、それを著す者の優位を導く目的をもつて、あるいは事実を証明する目的をもつて著作されます。私はかつて「『三教指帰』偽撰説の提示」(『大谷大学研

究年報』第四五集、一九九四年三月)を公表しました。従前「三教指帰」は弘法大師空海(七七四―八三五)の真撰とされ、およそ空海を論ずるものごとくこの書に言及していました。その序文に「自伝」と認められる部分があり、もって空海出家宣言の書と理解されていたからです。延暦十六年(七九七)、空海二十四歳の作とする『三教指帰』を通過しなければ、ごく最近まで一切空海を論ずることができないという様相でありました。

発端は、本学佐藤義寛助教授の『三教指帰注集の研究』(大谷大学、一九九二年一〇月)という大きな業績にあります。佐藤氏の研究では、本学図書館が所蔵する平安末期古抄本『三教指帰注集』は、夙に亡佚したとさえ考えられていた「成安注」であり、成立は寛治二年(一一〇八)、本学所蔵本の書写年次は長承二年(一一三三)から同三年であり、注釈はもとより『三教指帰』本文についても現存最古のものであることが明らかにされている。この天下の孤本は『三教指帰注集の研究』が公刊されたのちただちに重要文化財の指定を受けたが、この大著の刊行に少しく関わった私は、まず最初に空海が撰述したという延暦十六年(七九七)から約三百年もの間、『三教指帰』はどうしていたのであろうという全く素朴な疑問を持った。一方でや

はり延暦十六年、空海二十四歳の作とする真筆本『聾瞽指帰』は絶えることなく、そして複写された形跡もなく、ただ一本のみがこんにちまで存在し続けた。これは不思議としかいようがない。この『三教指帰』と『聾瞽指帰』両本の奇妙な存在形態に疑問を抱くことなくこんにちまできたことも不思議としかいようがない。私は当然偽撰を疑いました。その疑いの目で『三教指帰』を読んだ。その結果が上述「『三教指帰』偽撰説の提示」の公表であります。論述の都合上参考にした先行論文の著者にして当時にご健在の方すべてに抜き刷りを送らせていただいた。いずれ劣らぬ大家ばかりで、お一人が単に礼辞を述べられたほかは、貴殿の説、すなわち偽撰説に賛成である旨の返辞をいただきました。電話を用いた方もありましたが、おおむね文書で頂戴しました。

論文発表後一年余りが経った頃でしょうか。裏話を披露して恐縮ですが、先に文書で丁寧な賛意を表わしてくださった方から電話があった。本屋さんからの連絡で、弘法大師のなにやらを記念して、これまでに出た空海に関する論文を集めて刊行するという企画があり、その先生の論文も掲載したいとの申し入れがあったそうです。私の執筆当時、教あるなかでも最も格調の高い論文であったと記憶します。

その方がおっしゃるには、大谷の河内さんにこれこれの論文があつて、いまさらに掲載できないと断つたが、かつての願いということなのでやむなく承諾した。もちろん河内さんの論文のことは注記して明確に説明するので了解願いたいということでありました。まことに正直この上ない方で、私はただ恐縮して迷惑をかけたことをお詫び申し上げたところ、いやいや学問のことであるから、そのところははつきりしておかないとというような始末でありました。それから何年も経つが、その時企画された書物の刊行をいまだに聞きません。これは単なる私の想像であるが、企画された意図からするとその方は編集委員をおつとめになつたはずで、会議などで私の論文が話題になり、無視するがよいか、なんらかの存在表明をするがよいか、その扱いに困つて企画そのものがお蔵入りということになつたのではないかと思っています。

よけいな話をもう一つ。本学非常勤講師の会での立ち話。京都国立博物館を本務とされる方から話しかけられた。なんでも、その方にNHKから問い合わせがあり、『三教指帰』に偽撰説があるやに聞くがその真偽はどうかといつておいたので、なにか連絡があるかもしれません。その

時はよろしくとのこと。三週間ばかりが過ぎたが私の方にはなんの連絡もない。全くの偶然でありました。夜、比較的遅い時間であつたと思います。何気なくテレビをつけてチャンネルを回していると、なにか聞き覚えのあることが耳に入つてきた。NHKです。ちょうど司馬遼太郎の『空海の風景』を節録して説明を加え、おりおりの実際の風景を映像に配して画面を構成している。朗読の声がいい。「延暦十六年、西暦七九七年、一十四歳になつた空海は『聾瞽指帰』を書いて云々」と。この文句、正確ではありません。そのつもりがなく気ままに回したチャンネルですからビデオを撮つていたわけではありません。しかし、問題の所在は『聾瞽指帰』としたところにある。司馬遼太郎の原作は『三教指帰』と書いておりました。『空海の風景』の前半部、空海の青年期までの大半は『三教指帰』の序文に依つて書いている。私は直感しました。『三教指帰』のことを聞きたいというのはこのことであつたに違いない。NHKは私との連絡をとらず、別の方法を用いて確認し、司馬遼太郎の原作に変更を加えたのであります。

この四月一五日(火)から五月二五日(日)までの間、多くの方が参観されたかと思いますが、京都国立博物館で「空海と高野山」と題する特別展覧会が行なわれました。

弘法大師入唐一二〇〇年を記念する展覧会だそうである。

国宝『聾瞽指帰』が展示されていました。広告のパンフレットにもその一節が刷り込まれ、宣伝に大きな役割をもっていた。展示場内の空海の生涯を語るビデオでは、この真筆が画面をいろどり、「延暦十六年、西暦七九七年、二十四歳になった空海は『聾瞽指帰』を書いて仏教に対する深い帰依の姿勢を示しました」というようなそんな説明がなされる。図録を購入すると、これを収めるサービスのビニール袋にも国宝の書が刷り込まれている。一方、『三教指帰』が、空海を語るときかならず引き合いにだされたあの『三教指帰』が、完全に姿を消しました。かわってこれまで千二百年にわたって奥深く秘められ、まったくいいいほどに外に出さなかった『聾瞽指帰』が前面に押し出されるという、そんな状況にいまはなっています。

『三教指帰』の偽撰は確定しました。昨今の状況はその事実を示しているといっています。私の『三教指帰』偽撰説の提示は、反論に逢うことなく、公表のかわちをとる賛成論を見ることもなく、ただ十一年の歳月に借りて、広く承認されました。当初、反論に備えて用意しておいた資料は、多くの書類の下に埋もれて、今ではこれを探し出すのに困難をとまいません。

偽撰が必要があつてなされます。どのような必要があつたかということが問題となるが、私は先の論文でいくつかの要件を示しました。詳しいことは口頭では申し上げにくいですが、かいつまんでいえば、まず宗門内の(派閥争い)にも、あるいは社会的(神仏習合と南都北嶺の強訴)にも空海を改めて顕彰して東寺の力を高める必要があつたということが、大きな底流として存在したということであり、そのための手段の一環として秘在し続けて表面に出ることのなかつた『聾瞽指帰』を前面に打ち出すことが考えられたのではないのでしょうか。ところが、『聾瞽指帰』の序文はただに文学論に終始するのみならず、唐代初期の猥褻小説『遊仙窟』に関する記述があつて女人を忌避する宗門の風にそぐわない。早期に『虚空藏求聞持法』を得て真言を誦したという伝記上最も重要な記述も、空海自身のことばとして加えておく必要があつた。いま一つ、『聾瞽指帰』の結論である十韻詩は、中国六朝來の三教論争よろしく、仏教の圧倒的優位を説き、三教融合の時代に不都合をきたす。これも改めておかなければならない。そのような状況が背後にあつたと思います。

時間がなくなつてきたので次に移ります。はじめにある調べごとをしていたと申し上げたが、それは、唐代古文家

の先導とされる李華(七一七—七七四)が撰した善無畏(六三七—七三五)の碑文「東都聖善寺無畏三藏碑」(『文苑英華』卷八六一)に注釈を加える試みをしていたことを指します。善無畏は先の『三教指帰』の序文で自伝的に語られた文中に見える『虚空藏求聞持法』を訳出した三藏その人であり、金剛智(六六九—七四一)と並んで密教の宗祖とも目すべき人物である。一説には竜猛(竜樹)——竜智——金剛智——不空——善無畏——一行——恵果——空海と次第するいわゆる「伝持の八祖」の一に数えられます。碑文は『文苑英華』をテキストとして読んでいたが、『大正藏』第五〇卷(二九〇b)に「大唐東都大聖善寺故中天竺国善無畏三藏和尚碑銘并序」のあるを知り、校勘してみた。『大正藏』本は、日本応安三年(一三七〇)八月書写された観智院蔵本である。よほどの善本で、善無畏碑を読むときは他本を排して必ずこれによらなければならぬ立派なものです。ところが困ったことが生じた。『大正藏』は碑文に先だつて同じ観智院蔵本「玄宗朝翻經三藏善無畏贈鴻臚卿行狀」を掲載しているのです。碑文と行狀は一体のもののごとくであるが、この行狀なるものは中国側には全く存在しない。念のために日頃使うことに馴れない『国訳一切經』史伝部一〇に収める同文の解説と国訳文を見てみた。ずいぶん古

いものを引き合いに出して大変恐縮ですが、その解説を読んで驚いた。「金剛頂經系の唐代密教史料には表制集があるが、胎藏法門に関する限り、この行狀と碑銘と玄宗親撰の一行碑銘があるくらいで、こういう事情からいうも、この行狀の価値は頗る高い。」「この行狀の起草せられた時は明らかでないが、碑文の建てられた徳宗の貞元十一年(七九五)より遙か以前善無畏入寂の開元二十三年十一月七日直後であろうかと思う。」とある。これは『全唐文』の佚文だ、そう思ったことでもあります。じつは研究の過程で李華と碑文の中にして「行狀」の中にも出てくる鴻臚丞李峴の關係は私にとつては重要な課題であった。李峴は李華の庇護者であり、他の古文家とも關係があつた。善無畏碑は李峴の命を受けて書いたもので、「行狀」も当然そうなる。「行狀」が解説されるように早い時期に書かれたとすると、いろいろ考えを新たにめぐらさなければならぬということになる。大変困りました。

しかし何回も読み返すうちに奇妙な対照に気づきます。いささか煩雑になるが、これはまだ活字にしていない事柄なので、「行狀」を以下に引用しておきます。

玄宗朝翻經三藏善無畏贈鴻臚卿行狀

弟子李華撰

三藏沙門輸婆迦羅者。具足梵音。応云戌婆誑羅僧賀。唐音正翻云。淨師子。以義訳之。名善無畏。中印度摩伽陀国人。住王舍城那爛陀寺。本利利種姓。刹帝利捨俗榮貴。依仏出家。神氣清虚。道業恢著。精通禪惠。妙達總持三藏門。一心遊入五天諸国。久播芳名。大悲利生。有縁東漸。塗至北印度境。響震摩賀支那。我皇^聖集賢良。発使迎接。以開元四年景辰。大齋梵夾。來達長安。初於興福寺南塔院安置。次後五年丁巳歲。於菩提寺。訳虚空藏菩薩經。能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法一卷。沙門悉達訳語。沙門無著綴文筆受。其和上所將梵夾。有勅並令進入内。縁^比未得広訳諸經。曩時無行和上。行遊天竺。學畢。言帰迴至北天。不幸而卒。所將梵夾。有勅迎還。比在西京華嚴寺収掌無畏和上。与沙門一行。於彼簡得數本梵夾經。並是總持之教。沙門一行。先未曾訳者。至十二年。随駕入洛。於大福先寺安置。沙門一行。請三藏和尚。訳大毘盧遮那成仏神變加持經一部七卷。其經具足梵文。有十万頌。今所出者。撮其要耳。沙門宝月訳語。一行筆受^承旨。兼刪綴詞理。文質相半。妙諧深趣。又訳出蘇婆呼童子經三卷。

蘇悉地羯羅經三卷。三藏性愛恬簡。靜慮恬神。時開禪觀。奨励初學。慈悲作念。接誘無虧。人民或問疑。剖^開無滯。諸有水旱祈止。芸能大庇縮林。広如別記。後有表求帰国。有詔止之。泊開元二十三年十一月七日。右脇累足。寂於禪室。春秋九十九。僧夏八十。法界凄涼。天心震悼。贈鴻臚卿。葬于龍門西山。鴻臚^國季峴与釈門威儀定賓律師。監護喪事。以八月八日。葬于龍門西山。涕慕傾都。山川变色。

碑文が善本であるのに対して、行狀のなんと粗雑であることか。観智院藏本の原典を見ていないのでいいにくいところがあるが、例えば、^聖・^比・^承・^承・^承・^承字などは字形の類似した別字であった方が良し、「葬于龍門西山」の重複は明らかに誤写である。

第一に行狀は碑文の素となるものですから、碑文よりも一層詳細で、したがって文章の字数もずいぶん多くなるのが普通です。ちなみに『大正藏』は善無畏碑に続いてやはり応安三年(一三七〇)に書写された観智院藏本「大唐故大徳贈司空大弁正広智不空三藏行狀」(趙遷撰)を掲載します。二九二頁b段からはじまって二九四頁c段におよぶ大きな文章です。これと比較するまでもなく、やはり善無

畏行状はおかしいのです。行状の体をなしていないといつてよい。碑文そのものは、承和九年(八四二)に入唐して同一四年(八四七)に帰朝した慧運(七九八—八六九)の『惠運律師書目録』に「無畏三藏碑一卷」(『大正藏』卷五五、一〇九一頁c)が記録されているから、紛れもなく善本を浄写したに違いないが、行状の素になったテキストは疑うに十分なものがある。要するにこれは日本真言宗の不明の人物によって偽撰されたものであるといわなければならない。

それではなぜかかるものを偽撰しなければならないか。不空に行状があつて、善無畏にそれが無いのは均衡を欠くというものではないでしょうか。そして一番の問題は、じつは李華の碑文には善無畏が『虚空藏求聞持法』を訳した事実の記載がありません。これがどうにも不都合であつたのではないのでしょうか。李華は善無畏の訳出事業に関する功績についてほとんど具体的には触れていない。「行状」を分析してみると、その文は贊寧の『宋高僧伝』卷二(『大正藏』第五〇卷)善無畏伝に依りながらときに文詞に変更を加えていることがわかります。一方贊寧はというと、明らかに李華の碑文に依りながら、訳経事業については他の資料を利用して、これを一つにして伝文を作成して

いる。もちろん『虚空藏求聞持法』一卷(『虚空藏菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼虚空藏求聞持法』)も記録している。このように見ると、「行状」の偽撰は『虚空藏求聞持法』をめぐる、『三教指帰』序文との整合性を保つという必要性とも関わりがあるのではないかと、まあそんな風にも考えているのであります。

視点を變えて見ると、『三教指帰注集』(成安注)の成立(一〇八八年)、時を接して出現した大学文章博士藤原敦光(一〇六三—一一四四)の『三教指帰』勸注抄』の成立、同じ藤原敦光による『弘法大師御誕生記』・『弘法大師行化記』の撰述、成安と深い関わりを持つ濟暹(一〇二五—一一一五)による『統遍照發揮性靈集補闕抄』三卷の編纂(一〇七九年)、『高野雜筆集』の成立(未詳)など、一時に空海頭彰の動きが活発になっていた事実、あるいは最も注意を要するかと考えます。皇孫寛朝(九一六—九九八)による広沢流、小野の仁海(九五五—一〇四七)による小野流といったふうに、先にも述べた派閥の細分化と抗争の中にあつて、宗門の象徴的存在としての空海の位置付けはいずれにあつても重要な課題であつたに違いないと思ふからであります。

念のために申し上げますが、私は真言宗の教義や

歴史に格別の興味を持つ者ではありません。『三教指帰』
の場合は佐藤助教授の大業を側面から支援する過程でたま
たま本業から離れてつまみ食いをしたというようなことで
ありました。「善無畏行状」のことは本業遂行の途次に一
瞬の困惑を脱したというに過ぎません。いずれも全く偶然
のなせる業ということがあります。ただ、偽撰という問題
を考えるならば、後の人を惑わせないためにも、そのこと
はできるだけ早く解決しておく必要があるように思います。
そのうえでかつて塚本善隆博士が『浄土十疑論』の偽撰を
偽撰として問題とするのではなく、その書の出現と流行か
ら時代の趨勢を読みとられた研究法に学ぶべきものと承知
していることでもあります。『三教指帰』もそのような観点
をもつて復活することを願ってやみません。ご静聴ありが
とうございました。